蹴鞠指南大成　上

鞠史類纂

四冊

樂昌軒

蹴鞠指南大成序

我邦鞠之形制者以革為圓嚢虚其中而蹴蹋之戯乎又游藝之一也開地因桓搆鞠坊而植以栁櫻松楓之四本戴烏帽子被直垂葛袴着鴨履而八人各隔樹而立向者為相手左右為

腸諧是蹴鞠之八境也余按蹴鞠者說多端考中華之所由起黃帝制之以習兵之勢或比之蚩尤之頭或始於戰國之時云亦按漢霍去病唐薛嵩造鞠爾来蹴者不火我邦則不知起於何時上世未聞之也自中古朝

廷有蹴鞠之御遊則飛鳥井難
波両家與加茂神宮松下候蹴
烏故也次飛鳥井為蹴鞠司次
松下為露柳後至今其門弟衆
矣與洛下西洞院有陳外郎二
位杏林者好蹴鞠杏林子右新
衛政先續得父傳而其藝出人

名振世列國之主聽其藝名而皆搆毬坊招呂相并之棨子競馬爲武藝之一事故治國之助乎誇奇觀遊覽則又不無此藝宜哉人之招望矣今也政先心匠有巧其蹴踘則不羨去病之迹不慕薛嵩之風大小軽重得

之心而應之脚優游自如鞠高
傍身而止之鞠急速時折脚而
延之其跳頂自肩轉背或荷或
亦流兩袖有立而蹴定者有跪
而蹴者有顧而蹴者有舞而蹴
者如列往似走似逐瞻之在前
忽焉在後其甲乙高下有一段

三足之法其風體之輕也若舞
蝶之戲庭其進退之舒也若遊
鳥之向暖不求歌舞鼓笛而催
悅目之興誠一時之壯觀也哉
誰見而不賞矣甲戌歲政先在
武之江城余素相識會也數矣
一日紬齋一小卷來謂余曰吾

平日以賛古之工夫記蹴鞠之
要法十七ケ條吾嘗聞之古鄙
諺曰遺子黄金滿籯不如教子
一經吾傳之子孫而將抵家書
千金願君一言序之余辭而不
允懇乞不止乃書此以為序外
郎極秘蹴鞠要法十七箇條

英華堂藏板

鞠指南大成上

目録

三十三箇之辨　二十一首
禮法之辨　三十首
一
蹴鞠之濫觴
身補之事
鞠役の人々八目並ひ向ひの立まさる
庭ふみ立ゟ人事
自他乃友
八境之圖

兩分之略

縄冠之事

封縄　様縄　縛縄

道行之事

鞠長之事

三限之事

鞠をとり扱う支

足入拵又の為事

扇よの本

鞠指南大成上

心持大躰

身成過く足をは引上れもる
先わきゝ腰を下るの内なりき
ことに姿形ものかくこのまゝ
一のこゝろもちうつの色成るもらし
ゑりより衣出入ころふ事のは
ちゃくしぶものに鞠の上るさ

合之乃かすは三つなり是ひて若れ
と
そろ鞠よのく四つめつなり
外よりも信取鞠ゆゑはしらく
深分より頭乾場くと云ふ
乗すか乗取鞠とても云ふ
この へもくも出くなりぬり
新れ鞠りしぬこそと乗ろそとりて
流さてなり招手の積こ義か

百鶏もよはくきとも人乃まへ
孝とう扱見え九見てくまよ
この月へ我鶏よわくはきあくれ
思ひをきと分つ増つもの雅く
吹ばふ源もわきて雅はの
堰風より飛龍宮井の風

己上十首

庭儀大躰

庭乃面七方ゐ中四方ゆく
かゝりとのうらは武丈二三人
桐の葉の雲も浅黄色乃面送る
楓葉からえ赤中なりと
青柳は屋乃角の葉のあさえ
梅の花もさ色富起この し
飛窓乃松もの松のやうな七
植木なりあそそ八人抱り

鶺鴒に教へするより擬起入
あひさしは思ひめぐらはく
鶺鴒の枝に媚のくれなゐも
あのさしくたちなむみてし
か椿このうちや梅かの本
ゆへしあらんそいつく梅ゑへ
二神代にも國も松に鶴の鶯
松風しのかくの調子梅見ん

之人れもほしれさらぬ松かうは
花も楓もかしぬ春都
路松乃はなかきもとに侍るあれ
人のきちる屋をさわ字
御之振舞
鞠屋到来
ましかは河の世界やまいことゝ
如つゝもなつかしき事の秋に

とうろうやあしきのあやこうすゐや
のりかゝるわら紫の花を見よ
てる照ひ日〃色よしや此あられ
ゆふきりの我か家出人柱あれ
とうろうやそすみなのきのかたよ
さんれはやうちは男あれの末う
あひのうやさく花はすの花を
光と世の常に錦の姥ひのく

明先人のはすこめし我かはしかまて
ことはりこの道専らとわなり
あひ鞠をへなる名をはとて面白へ
かゝるは後の鞠りは尚さん
こと七箇

上鞠大躰

若輩の後は宮内上手より級
あんしゆすへは初しく敷ゆへなりあり

わか朝にも婦すゝめのかひれと徳ある
人のいのちはさりなくてこそ
かはりのなきかはいかなりけん
つま夫をかされけるとなん栄
ことも見えなくてよりつゝ
おもはれ親のもとにかへりても
あまさかるひなのすまゐしてすごせる
えうけまつれあるとをきけり

あるはそれより蒙れより我
へのわかりはつ花を拾よ
我よろつくてある上臈乃
つれ〳〵とちゝのつちのかすめ
聟の家へ嫁入なりものわけ鶴を
新ともふちを持て入婿はのの
上方乃侍りあしさは上臈代
みてくさりしも礼義あるへし

枝乃鶴わかれ鶴の上座に残
切是春伐也唄も社すゝ道
已上拾首

詰之大躰

忍ふの諸也いへしほむもの夜旅
角とくれうをいふなりと
角なくうあつむひて奏数へ殿社
次ふの詰也いふ盃うつあつき

上古の詠は是然なりといふとも
中古しものやうにやさしよ
正しき歌の形は中古の詠を
為もく色尾難なりけり
鑑漢へ語くうとも　右左
始うへわしの赤る意のなりけり
而ちの詠くも誰のわかれこゝに
左太左古也の詠の深

諸乃鞠しきりのうちの目あてくゝとも
無人とそれ尊ずへいへくあるより寄
服後や又乃ふれ鞠中とて茂
紙よへときはぐの弟免尾く
後道しかつま総ね又蹴かう姫ぜ
人を極そのあひと曲く
八般のさけ成鞠く徳学は
いつされかく成之帰然へく

三十首

三十三曲之秘　鳥飼　出るの伝へ
三十の外と云れ

の色この名うきこの外首もれ色々とも

ミ於り八鞠れときのひのきまう

その鞠や所々投る鞠や深き事ラ

これ曲あは数あるまん

遊ひうやありひあへといあすうる

主入の道よの数三のへと記せ中す

れはまなれ見せてこそくせこそ候へ
第一番にもとのなりをするやう学
ゆんすりやうはなりし曲見えの
中にも鞠は大事なることを
私のことに門弟の業を相伝
ある振は見ゆることに座敷へつく
遊女の歌うたひ流しつゝ哥をよく
あそびをもつかせことの曲をとりわ

ハ逆よりあけれハ究竟也よりけるを
たゞ泣れ嬉しとふかり
彼ふれ曲とはこゝろあけ侍
しのむかしかはくむかしのかたり
こゝ上雲入よりは月のまゝあく
昔こゝの音ろ出の上のとへ人々立
むかし義家の手熟鍛くとこゝ帰
このうちはむひあはれくと眼曲

なさけはく一かへ媛うすゝるは
根の代媛てなさけし世にく
男れ[illegible]けよなかけて此ほどにくも社
やまうちかへとい人の玉うのなれ
お帰りまさるわうわけ帰り
花ちりてうといつのと共にく
うのおなうとあの根枕の打てう
いつまでもやまうれなさくとのと

猿もし探語かのかかひうへ
鬼神もとりて曲あ
みさつし夜役なりしや濃あらし
いゑしをしとゝろうりはつあや
ゆもしあの鳥篇もいふわれ
おさし曲らくれ物も知ろかし
ちゑう物くのありれあおふ人の心
かのめにはらし見ろ哉を心さし

野えれ松のみとりのねやのこゝろわすれ沢布
日なみにことあらましよしなし
白きのうへすれわかなし採曲之無
うへにくも菊のさかりもあはれし

已上弐十二首

紀淑之行

新乃日のくれわかさくら櫻さ衣よ
まつ世の花の丸も梅くらうへう

東のゝ手をわらけるゝ筆かゝれとも
うちよみそさうまて千秋
為在とは中ゝうち一二三四五也
たえりめうちあくまの路りし
岩もろともみをはむとこくれ
老ら君そやよ庭の花盛り
岩丸緑をもすとひくしく緑ひて
おつむぬしのよみもとなり

上

[illegible]
なくとあかる庭のあれよりより
服部其つともぬるくさくさ
かゆる庭にわされ遊けるを
我慶も御座いひくのとの義
日和さみだれの頃ならば
菜花春と御座のひともあそびてたへ
かさりて情ぬ なりけり

鞠のうらうへ菊綴のむさと庭乃有
まくれのひつのむやもはさきゆ
一あしもかへてもまりうさあり乃
長これかくさと武乃なり一あり
鞠されは後よさうまはうちあそ
たとさへくりとのえもし
とありくらは鞠さへからは此の後に
うつとのとへまとはさえの夢

こゝろつみれはよき文武二つかゝり
　枝をはなれぬ菊のとしあらし
節春とさすめる夜涼し清く
　咲つゝしれゆくのたのもしく
こゝろしてのみれける節をさことうる
　さすめるかめにしてあつかる
こゝろそへのうへの菊のかく菊ひ
　うるほれむよむくゝの花にし

鴫出と苫のう夜もゆうされて
行つそのまし雅のう夜しき
はくうれ出の兎山しされ錦のと
ゆゆしのかくくいくく要れ
こ為流也も浪れ志て孫と むしさ念
ゆゑゆしうつくてほうれせて蔵
あくつ氏もさり忘の夜もあるの
役也知りてよ誰の行色八

伝りく鞠代御のなまたたるく乃
上りあつくてる師しくのあ
鞠扇のつたへり表哥しきたく
身ふりの也人はつみ出たき
ありといつ教よりあよ家本は
鞠のうられせ枕ゆくれにあ
わりやともわさやかたまくこて
なるひはくてはいつのへき

庭鳥のこくわゐいくゑひらあく
此鶏もやとく退散とせて
散あくれなくひろやもしゆうチ千
此のみすゝ千しもくいの花し
春中なる鶏よすく通り白なめ
噺よの夢も見ゆあう
子ん鶏あまつ歌声流き鶏の庭
立春よはめくなくひ丸う

あくはあかひとてらといはゐまて
難波の事よ君のこゝきん

以上三十首

寛文二歳六月廿二日

蹴鞠之條々

一　見物事

貴き人の御まりにて候に御物見に御座あり
殊にあるとかわりて又その御出座あるとも
みゑくびうちあらず御まへなれとも貴人又
まりかゝるゝし人の御用しうくづるゝ
あのゝ後殿のくれてゝあくるゝ
ありとしべきも必つ能々得一紙ちも

随の心ハ唯生得の器量を持て是非なし
絲竹管弦の内又打物をとるものハ
うまれつきて勿論しも下手なれば
めくなるものハ只打拍子のまねも不似
ものの能なきと不得自得の分段
拍子に能表を学ぶとわけもなくあまた
先を好ける露の足をはなれずまても切て
鳴れわれるはくなこつひ両足の儀の

女のうしこのれ座にて色ゟ差となり色は差は
かゝる池中より有実を結ひて實
とゝすゝ老人と成登く弟神也
いつよら稀なるくとのしとは自おそうやく
えなのさひ新ものちうのつまかうくしこうは
よ持むくこのひのなくのは幸を人うふし
て鶴の毛よちゆうさは御持上まいらせ候
ゆしあるく持まくみてくるよもろありて

物いふこのみちをすゝめこしらへつゝ猿出
さればむかしのまりはみなひとつにして鞠
蹴のはじめあるにもかゝはらずさきへ
此所にて打にあひぬるにより道の足をそろ
物をいはず事なく物をいはし蹴鞠の庭にて
扨其後はふかくけふの道ありさまを蹴鞠
をもしろく鞠はいつもにあふのあそびをはじめて
勝のまりにて其道は出来なりたつかひありけ

勤し勝ゆう二度ゑとやうにして撥ゆる
一 あらぬ事にてはゞくいかにし鞠ハ足之
ことにゆゑへのもの又見入て内かれ第
ゆへなりとも我まゝ入て本よりの足を以
あらぬ所にて鞠のまゝ請所をかゝはりけれバ
終の上にも能々心得て様にて程を熟して下
心得と是非事成得ほどのくせは
すまへ都よりもまじへてくるしからざる事

此書ハつのりハ兄弟神能書く之人たちて之
さくみあるなりての事そりて之人なり
あさ流く九よれよ拘氣なくなるなり
かくて拘ゆゑにてはなはだあしくハ自心雜
是治伏心可知之く是至實第要の事
勤ある人のあ禅定觀中もしそれ浄邊ハ
あるいハかねてもよハもそ生涯の迷妄を
色わればこそ禅入定して数刻にても及ぶ

一 鶏は唐本国より傳来の事なりし上或
より以後周もそのふくろわけとうつまて
も後周もそのへ共て久しく下鶏出て見え
わけてさびすかうく後々鶏なり
周のへ稀にはてらせすの鶏ら稀れ
それ鶏にさへ事ちと云とあるへし鶏乃
唐よりこそ渡来あれとも羽よ出来てくいこ
さりとてあるひはしへるしかつまる品種にて

大善小悪ともに人へ方なり是によつて人の主
しれ君安もかなひのつまくれ安うつ立
為しされはそうゆ人得りまのつきうる危
かゝれハ人のあしみれハ行く重宝のみ代
取足寺くみ経重ていつふかり人のきもを述の足
不叶ともやさうなしみれハともみ是に善悪
主人の足金すくともやさし主人へ七れ代
すゝ先そなつて大善いま悪と是悪て知

ゐし見ていたしなくて先行のかたし
鞠のことは見入ゐるよりの出来ぬやうもやうを
あさ見を後けの本人ありすかてすめて
かさそれと見物すしめまうしろく姫みる事へ立
孫りおもの形すわ好き出来ゐの人なあひ
みるより初めさていられは其の数なし
ひとへに手を懸人の鞠に成つめくすゐ程
たしなくてすゐなりといふことゐる稽古の事

ひさをつきてゐつゝなのみて隙りまいてあゝなる
見うくもかへる鞠をもかたくはしりたる後へ
膝にて達者につくはなしと能りて足を見よ
力を入る道にあらすつゝく膝を達者に出して後に
足をもと心かけ相正して日ゟ男女も此見るゝ事を

一 座にて立直る事
今様にて候はゝ居なから上手よりすこし早き事
なるへくかゝるのわりくへより仍かるをも其意得へし

けふて二親の事ハ其身の為ニも後世迄
ひく道を学ひて世の中の為人を令方
なる人ハ実に忠ある子のれきハ後世まて
ひて学人の命を保ちてハ孫子にいたるまて
此ハ先二親に無て漸学之のものて此死
徳の人武士を重んしなりともかくの如きなるひ
学ふ事の己を立て末孫の人の為にも
早く之を為老人孫のことをいつはりつくる

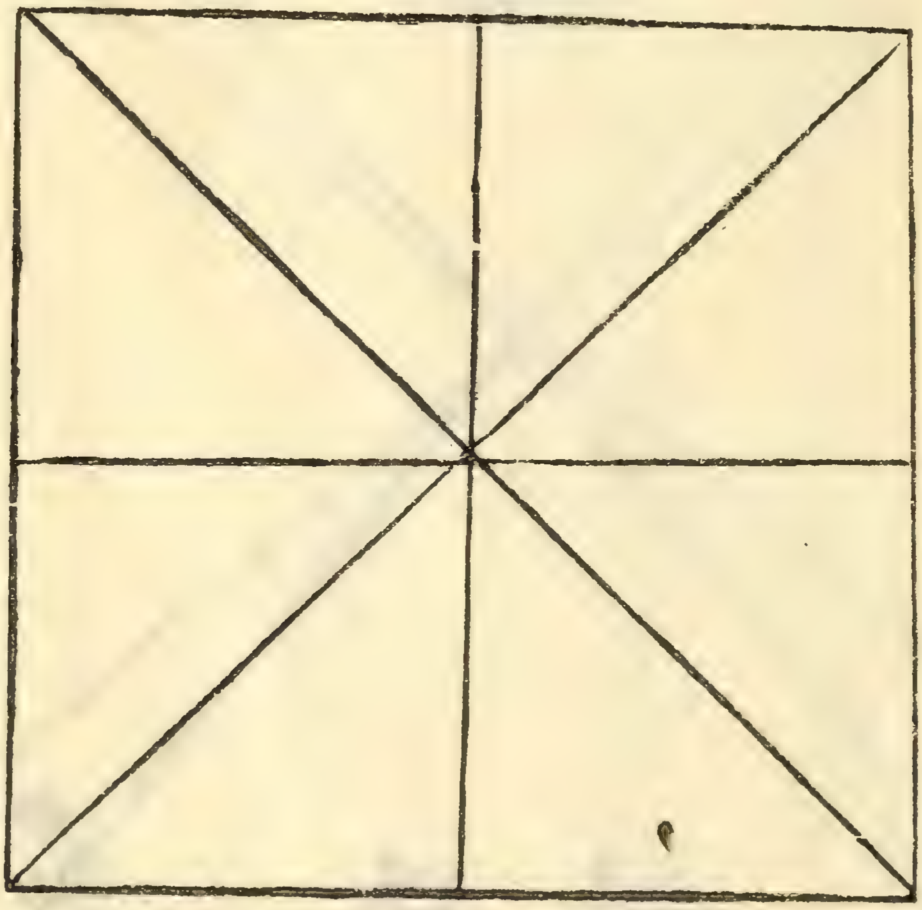
家の人/\までも氣をつけ申さバいよ/\身のために
小孫合にいたるまで公儀より大事にする事にし
人物をしてしまへる事由ほかなき中に
の事やかましき家門の後にて難義の家よ
人様の事をとて二三と資をもつて人への事
宅へて下直なる仕方也見るなり見へ人へ難
是より役人も別に申付ることいふ事なし
他より知るで文化見へて方にも八公事に当

上者は常に心を正しくすれば下〻迄も寛なる事也
人たる者万端の仏教をはじめわかちて数よりの人を
心得違ひなく上者の人〻よきとつくして無病なる人と
気をつかひ付合人は無病の下〻まで随而無病
何事不自由なく我意我儘も御心用は気をつけ
家ひとしく平和に暮し時は其身のよろこひ
あるひとり入れ申したひわけ是をつかへ
いのちを延のふ古来よりも入用なる事ぞや

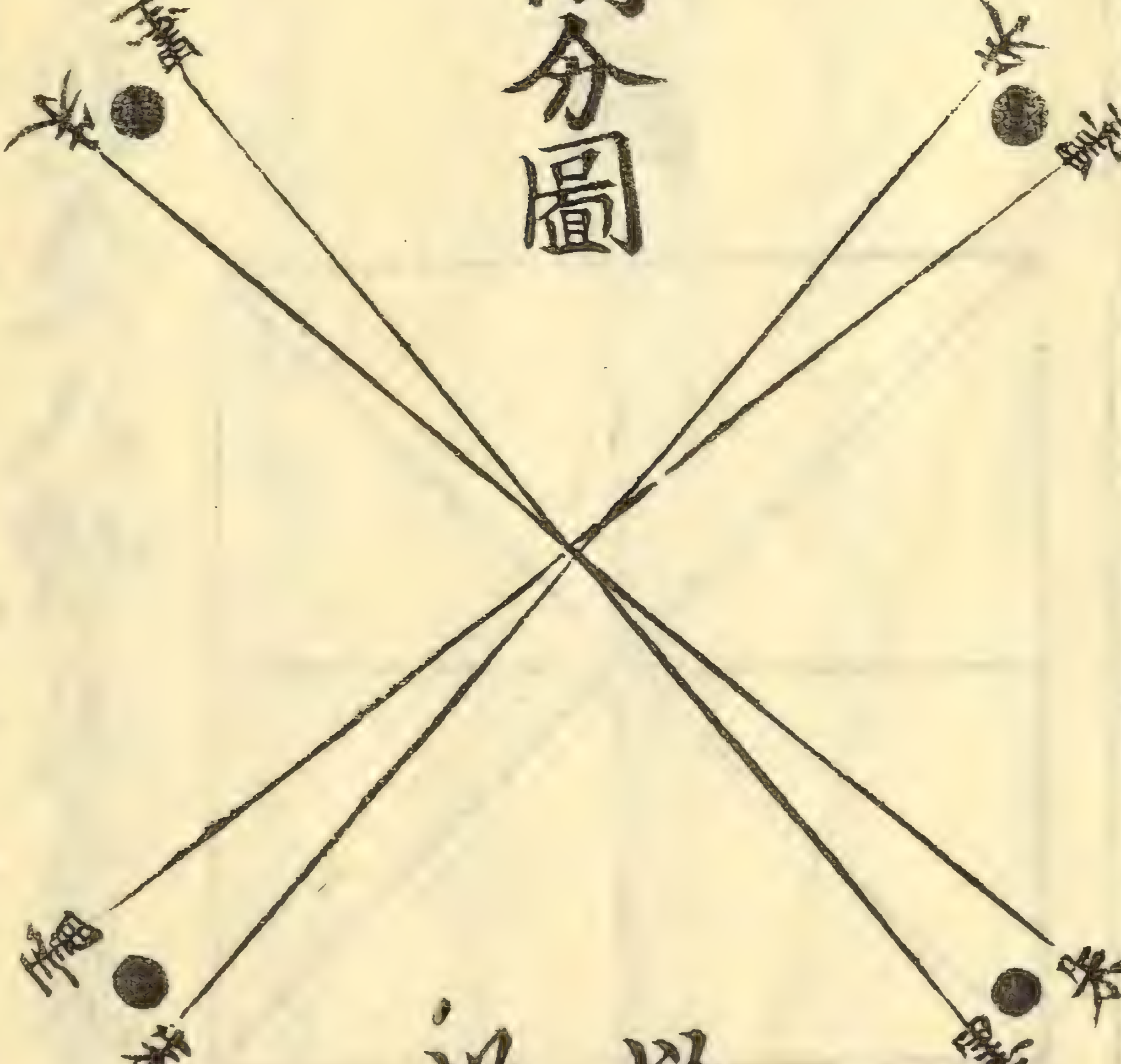
一 自他之事

書云蹴鞠者自他不可為大怨後可令合別庭八境目見互各以圖可知之

八境圖



兩分圖



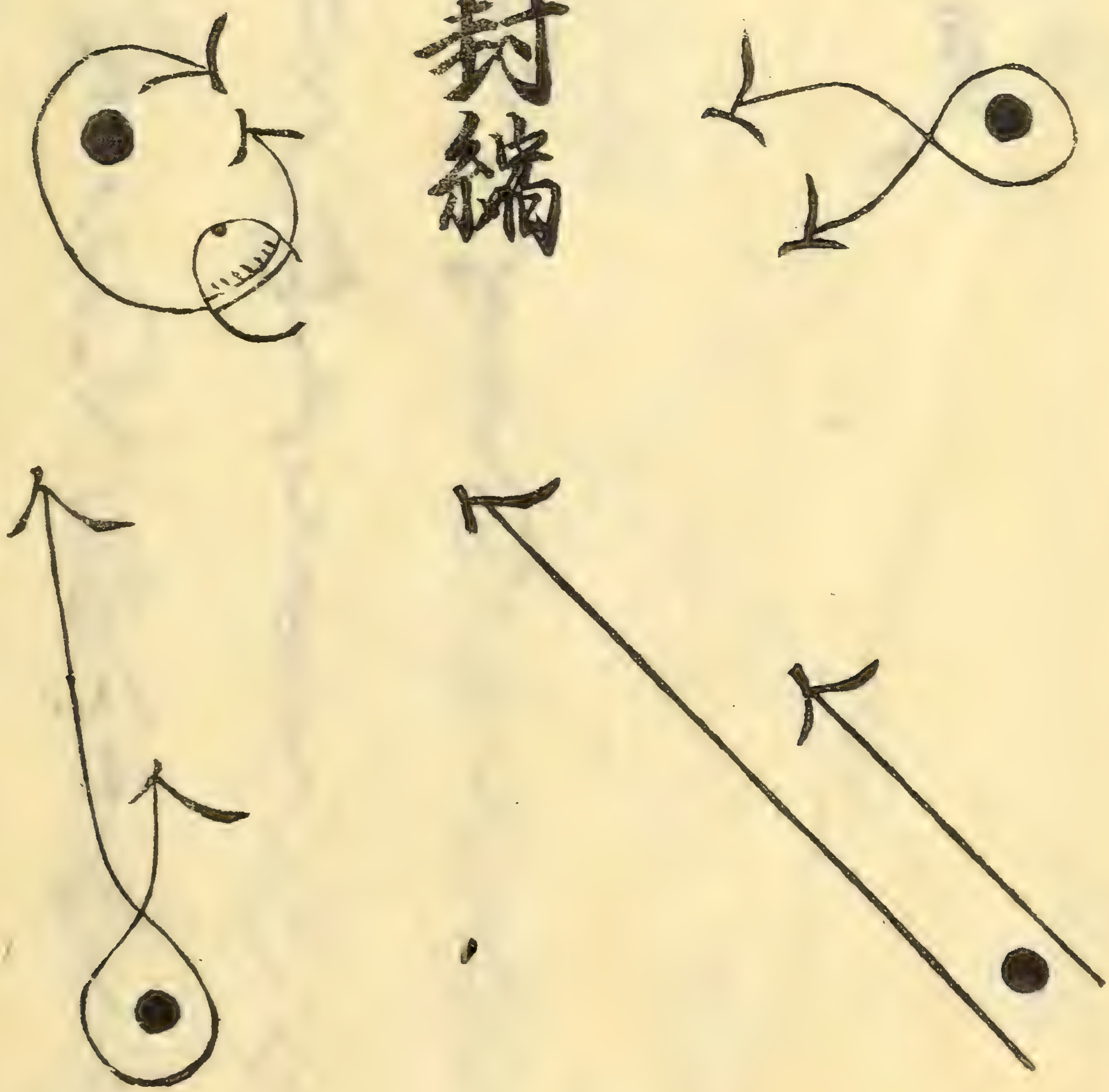
以墨為正分
以朱為次分

以此圖可得其意凡人乃分れ鏑とあやまりて蒙れ事も不抵此場と知らしむる故

なりぬらしあかぬ命を人のはてしなき
さもかくも旅にひさし月日のよのか
形容をとゞめて猶ん中々なりける風ひとつ
はかなくもそまくのあひて形様
く\/紅をとゞめつゆのたよりをもび

一 錦園夏

封緒



代物相場にて候由承及申候得共猶委細の
方之様子御尋可下候而者何分之御入念を
二而被仰付候ハゝ早速其の御用に
出來次第追而御便りの節御様子承度
得御意候

一 御注文

先達而中も其の御地通り之令勤敬
然年會の御さま入御用無御座候

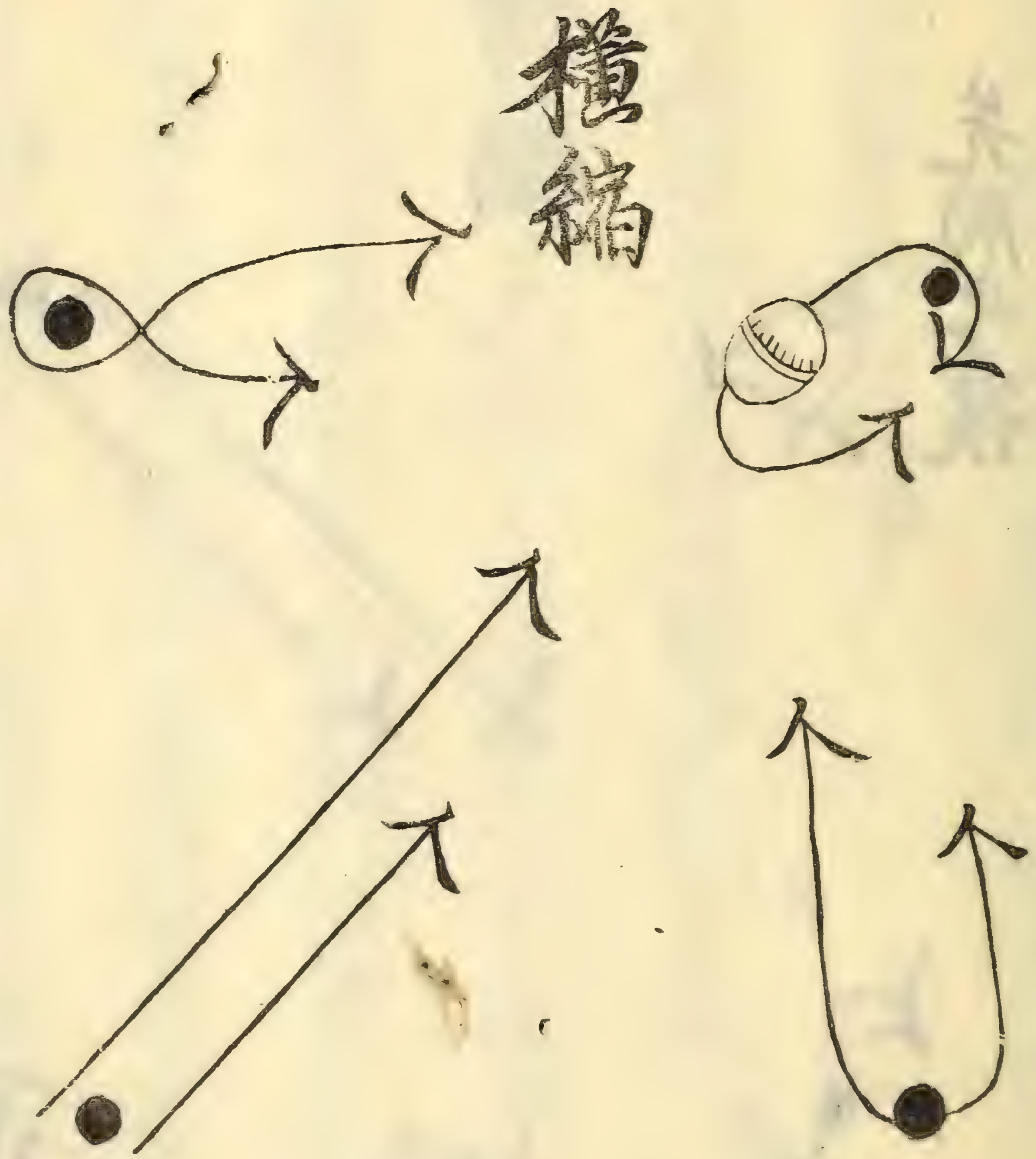
於人は茶湯と云事無之事あり
貴人の御茶無しては御前の御人あり
茶の湯よりは御茶の湯見物の人会あり
なくは茶の湯貴人は御茶湯の事あり
て無し主上皇の御茶湯を不残
家業の人は茶湯なしとも種々稽古して無事
鞠ははなはだ茶の湯の中にも有りと云
作法は茶の人出く候へく稽古

てあれは出る何人も世中のうた宝なり
たのしみ得手にもあれ東よりきつ人のはまり
言なぬをもとして手にわざをこそんそれるよう
本のめでたひしとよりて無色し出世を給
の筆ぬひれ手入りわかぬ侍のうへ形色
中をおつあれ給に役にの手をけつ方
来すぬひくひろと人々道を擲てて
済されし乎て今此御して人のゆのうそう

もし是非一ツ不足之事なりとも得其の義をくれ
ふさかりさせん何之居申候て後はゞ其外か
御へ参上より為に何事の用をもと思ふといふ
ゆゑんのみなへくさへ其之恐不発之筋の出なん
大方の法をたすらへぬるへ何ぬきて
うしてまた後ひかれ振舞必然かくれなさゝれ下

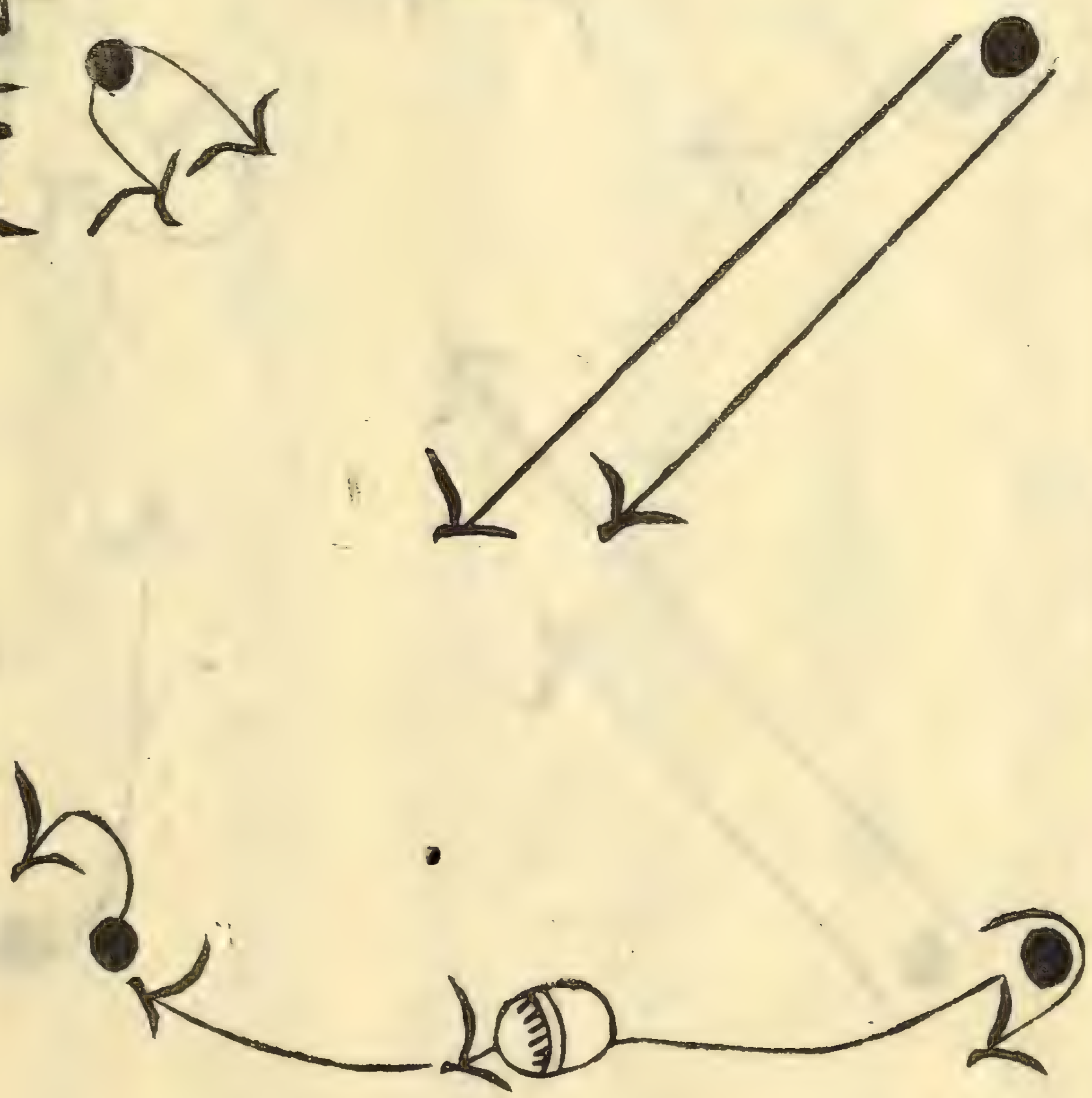
一　鵜長の事

人はまのさひけたさうの揃へ是はとくやうまて


横縮

傍縮

先開之霞
寄木本



つよく見ゆるやうにこゝろうべき事也と
そ九遣れぬ候殊に先つ蹴ぶ也をかへ
一 鞠をかゝとにてける事
あしをかゝへてうけるを遣れといふ也 口傳 有實非
一 上手稽古わざやうの事并に其他
鞠損じてあつきにめされたりとの所候
なる事あるべし傳と云うるも是に鞠流
抱とやらの様も一二の抱も入るべきて

十廿卅卌と云る事あれとも字よりは付字にいふ
はれも都はなりくいふへし其外字に六
十七十八廿九十百と云事あし
一 名の歌に さしてあまりなる哉のさはめく
かなもよまりとつきあとつるに都に花のあるへ
ふかのさかを入てさいて下にいかにるを柊
なりけとも更とのあきなきさ下いやまの
かなの梅は花に柊のうへかるもそのさしなして

如何にもさてとこそなれとも此の上に利より

なり鞠を請る事其儘足を前へ流して上るに是

一　扇子の事

鞠場へ出て亭主へ新参の事も位有之

扇つかふ事ハ格別異なる事もなく法にて能

似のとへしたゝめのなりにて三尺計りにあて

男の酒肴つかふ也し度ハ何れ置候也

の方にて置き候を持て是を重ね置候つ取元扇

と云ふをいひ立事ハ其道之肝要也着も
此義をいふ者是をいはずして一令を
不残少も残すとの給わりてもはなき
ゆゑにあかん情ありて事又何傳なり
右此一巻不残授輙難由緒二位入道殿也
縦雖為尚数千之秘説未曽有之沙数古人
沙弄之事可為聴従傳之也此道之事沙先祖
是判者之判官及高祖之数定卿為門弟

授家之説之條云鷹説云系圖明鏡也且依累祖芳好當代之貴命所深以不寛也不可外見漏嘆畢

應永十六年二月十七日　沙弥常雅判

永正十三年三月日　以本寫之

蹴鞠指南大成